

キャリア・デザインのための インターンシップ

「U高等専門学校:電気工学科・助教」



本校では、企業等での就業体験を通して、学生の学習意欲を向上させるとともに、高い職業意識を涵養し、責任感や自立心などを醸成することを目的としてインターンシップを実施しています。本科では4・5年生の選択科目「校外実習」として、専攻科では必修科目「インターンシップ」としてインターンシップ関連科目を開講しております。本年度より、本科では、従来の5日以上(18日未満)の短期インターンシップを1単位の「校外実習Ⅰ」として、新たに18日以上(長期インターンシップ)を3単位の「校外実習Ⅱ」として新設しました。また、専攻科の「インターンシップ」においても、従来の15日以上(長期インターンシップ)期間を20日以上に改め、日数に応じて3単位から最大で12単位まで修得できる制度へ変更しました。これらの変更は、長期インターンシップとして1ヶ月以上に渡り業務に関わることによって、企業等の活動理解の促進、社会人としてのコミュニケーション能力の獲得、自身のキャリア・デザインの明確化を図ることを目的としています。

インターンシップ参加学生には、事前教育への参加、報告書の作成、報告会での発表を義務づけています。事前教育はキャリア支援室が中心となり、参加の目的や意義、提出書類、ビジネスマナー等の説明および企業人による講話を実施しています。受け入れ先の決定後から事後の指導までは、短期については、本科生はクラス担任が、専攻科生はキャリア支援室が担当し、長期については、受け入れ事業所ごとに割り当てられた教員が担当します。県内インターンシップでは、可能な限り事前に企業を訪問し、研修の内容を確認すると共に、就業時間、服装などの打ち合わせを行っています。実習後は報告書を作成し、担当教員が内容を確認した後、企業の方に最終確認をお願いしています。また、報告会を実施し、インターンシップで得られた成果、課題等を報告します。

本科では、選択科目であるものの、4年生のインターンシップへの参加学生は増加傾向にあり、本年度は4年生の学生211名中182名(86.3%)がインターンシップに参加しました。山口県インターンシップ推進協議会を通じて、県内企業等での短期インターンシップに参加した学生数は4年生52名で、長期インターンシップに参加した学生数は4年生12名、専攻科生5名でした。

インターンシップを終えた学生は、働くということの大変さや厳しさを実感し、学生と社会人の違い、ビジネスマナー・コミュニケーション能力の重要性、自分に足りない能力等に気づいたという感想を報告書に書いていました。また、多くの学生は、懇談会などで社員の方々から仕事の話だけでなく、学生時代から現在に至るまでの話などを直接聞くことができたり、進路について相談に乗っていただいたりしていました。進学・就職を目前にした学生にとって、インターンシップは、自身のキャリア・デザインを明確にし、その実現のための目標や課題を考える機会になっていることが報告書からも読み取ることができます。

最後になりましたが、学生をインターンシップ生として受け入れていただきました事業所の皆様、事前研修及びマッチング等でご支援いただきました山口県インターンシップ推進協議会の皆様に厚く御礼申し上げます。今後も引き続きご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

高まるインターンシップへの期待と現状

「T高等専門学校：土木建築工学科・准教授」

1. 本校のインターンシップ（校外実習）概要

本校では、第4学年の夏休み期間中（8月中旬～9月中旬）に3学科とも校外実習を選択科目として開講している。実習期間は1～2週間とし、期間によって単位数が異なる。

本校では基本的に、実習先の希望調査（4～5月）からマッチング（5～7月）、学生への連絡、書類作成指示・確認、報告会の実施、成績評価までの一連の手続きを担当が中心となって進めるため、担任教員の負担が非常に過大となっている。

一方、学生や企業・官公庁の視点から見れば、校外実習に対する期待は高まる一方であり、人材不足が声高に叫ばれる社会情勢に後押しされた形で、単なる就業体験を超えた熱意が学生と受け入れ側の双方からひしひしと感じられる。実習後には学科単位で報告会を実施しており、学生が互いの体験や感想、学んだこと等を自由に発表しあうことで、同業他社や異業種に対する良き情報共有の場となっている。



写真 報告会で成果を報告する学生

2. 平成29年度の履修状況

機械電気工学科：履修39名/43名中（履修率91%）、実習先のべ数：45（県内23(5)/県外22）

情報電子工学科：履修24名/38名中（履修率63%）、実習先のべ数：28（県内1(0)/県外27）

土木建築工学科：履修44名/44名中（履修率100%）、実習先のべ数：56（県内16(5)/県外40）

※ 県内（ ）内の数字は山口県インターンシップ推進協議会の利用者数

本年度は土木建築工学科で校外実習の履修率は100%、機械電気工学科で91%となった。情報電子工学科では、県内企業での実習が1名と少なく、学生のほとんどが県外企業に行っている。土木建築工学科でも約7割の学生が県外企業で実習を行っている。県外組には「(地元就職希望だが)1度は県外or大手企業を見てみたい」と考える学生も若干含まれるが、昨今、県外企業からのお声掛けが活発であることに加え、学生自身も県内企業を知る機会が少ない。本年度は、6～7月頃に複数の県内企業より実習生募集の連絡を頂いたときには、多くの学生がすでに県外企業に決定済みor調整中であった。

3. インターンシップ報告会

本校では、プレゼン形式での校外実習報告（写真）を学生に義務付けており、受け入れ先にも開催案内を出している。本年度の土木建築工学科の報告会では、関東地方から県内まで14社21名の実習担当者の出席があり、受け入れ側としてもインターンシップに高い関心を寄せていることがわかる。

4. その他（協議会や企業への期待/要望など）

学生たちは4月当初から企業研究に熱心であり、実習先を早く決めたいとの思いが強い。このことから、本協議会HPで公開される受け入れ先リストに先駆け、事業概要や受け入れ条件等を明記した実習生募集の案内（A41枚程度でOK）を早い時期（4～5月頃）に担任まで頂けると、学生にも周知しやすく、県内企業への実習増加も期待される。本協議会および県内企業・官公庁の皆様には、インターンシップに対するより一層迅速な動き出しをお願いしたい。

インターンシップに対する本校の取り組みと情報工学科の現状

「〇高等専門学校：情報工学科・教授」

インターンシップは、就職活動を始める直前の本科4年生あるいは専攻科1年生にとって自己理解と職業理解を深めるための重要な機会となっています。そのため、学校全体の組織であるキャリア支援室が中心となり、他のキャリア教育と連動する形で行っています。本校3学科4年生のインターンシップへの参加率はそれぞれ、商船学科、電子機械工学科はほぼ全員、情報工学科はおよそ8割となっています。また、5日以上インターンシップに参加した学生に対しては、成果報告書の提出と報告会での発表を条件に、1単位を与えています。但し、授業を休んでインターンシップに参加することは推奨していません。参加した場合には欠席扱いになります。

本校学生の6割が県東部（岩国、和木、柳井など）の出身で、広島県との県境近くから通学する学生が多くを占めます。就職先としては県外が8割を占め、特に岩国錦帯橋空港が開港してから関東方面への就職希望が高まっています。以降は主に筆者が所属する情報工学科の現状について記述します。

インターンシップ参加企業ですが、数年前までは参加した8割以上の学生が県内企業へ出かけていました。しかし、近年、企業の求人意欲が高まり、県外の大企業からの募集が非常に多くなり、今年度は参加した9割近い学生が県外企業で研修を受けました。要因としては卒業生が就職をしている企業や日頃からテレビなどで名前を聞く馴染みある企業からの募集が多くなったためだと考えられます。また、多くの企業が交通費と宿泊費を負担するようになり、県外企業へ参加しやすくなっています。参加したインターンシップの期間は、主に、8月29日～9月15日までの、5日間または10日間です。この間以外の日程で参加することは体育大会、学校行事などとの兼ね合いで難しくなっています。

インターンシップの内容ですが、1) 安全教育、自己紹介（他己紹介）、グループミーティング、2) 課題作成（プログラム、CAD作品、製品企画書、機器製作）3) 工場・施設・作業現場の見学、4) 高専出身社員とのミーティング、成果発表などが主でした。その他にも、職場会議への参加、営業活動への同伴などといったものもありました。参加した企業に対しては、修了証明書と称し、研修した期間と場所、実習時の気付きの記入をお願いします。気付きはコメント程度のものですが、その言葉からは学生の研修態度がよく見えてきます。ほとんどが熱心に取り組んでいるとの評価ですが、中には「スーツ姿でくるぶしまでの白ソックスをはいていました。マナーに注意して下さい」といった指摘もあり、事前研修の参考になりました。

研修後に行ったインターンシップ報告会での学生の成果を聞くと、社員の皆さんの働きぶりや考え方を聞くことで就業イメージが出来たという意見が非常に多くありました。更に、コミュニケーション能力やビジネスマナーの大切さ、英語力の必要性などを多くの学生が挙げていました。これらの意見を聞くと、インターンシップの実施は教職員にとって相当な労力が必要ですが、それでも組織的に実施する意義は十分にあることが確認できました。なお、報告会を次年度参加する3年生にも視聴させることで、参加意識の向上を計っています。